

「石のまち」大谷

～ 大谷石文化のストーリー ～



はじめに

宇都宮市大谷地区は、日本を代表する「石のまち」です。大谷石の利用や生産とともに発展してきました。歴史を語る貴重な文化財に加え、石の採掘により生まれた独特な風景が有名で、観光客が多く訪れます。また、持続可能な社会や未来を実現しつつある「SDGsのまち」でもあります。平成30(2018)年、大谷石文化が「日本遺産」に認定されました。今回の展示では、「石のまち」大谷の歴史・産業・文化などを様々な角度から紹介していきます。



▲ 古代から人が集まった大谷寺

第1章「石のまち」大谷の歴史

大谷は、魅力的なまちです。その魅力によって、多くの人々が集います。すでに縄文時代には人々が暮らしていました。古墳時代には古墳や集落で大谷石の利用も始まり、奈良時代には僧たちが大谷の岩山で修行したと言われています。



▲「石のまち」大谷を象徴する風景

その後人々の生活の中で少しずつ大谷石の利用が広がり、明治時代には大谷石産業が確立したことで、石を掘る職人たちが集まるようになりました。その後、大谷の素晴らしい文化財と文化的景観に魅了された芸術家たちも集まりました。昭和時代に入り、戦争のため、一時採掘場が戦闘機を作る軍需工場となってしまいました。戦後、大谷石産業が復活するとともに多くの観光客も大谷のまちを訪れるようになりました。



▲ (上) 古くから人々を温かく見守り続ける大谷観音(千手観音)。「大谷磨崖仏」として国から特別史跡、重要文化財の二重指定を受けています。(写真提供:大谷寺)

▶ (右) 明治32(1899)年、渋沢栄一は大谷を訪れ大谷観音・人車軌道などを視察しました。その後、地元旅館の盤水館に宿泊。この写真はその時の集合写真です。最前列で石の上に立っているのが渋沢栄一です。



▲ 盤水館での集合写真 (写真提供:田中家)



▲ (上) 令和8(2026)年、大谷資料館の「大谷の石工用具及び関連資料」が国の有形民俗文化財に登録されました。(写真提供:宇都宮市)

▶ (左上) 旧帝国ホテルのレリーフ(一部): 関東大震災を耐え大谷石の建物の安全性を証明しました。(渡邊哲夫氏蔵)



▲ 雪をまとった平和観音

◀ (左) 令和6(2024)年「大谷の奇岩群と採石産業の文化的景観」が国の重要文化的景観に認定されました。戦後、世界平和のためにつくられた平和観音はその構成要素の一つです。





▲現在採掘している石山〔高橋佑知商店〕

第2章 大谷石産業の発達

明治時代になると、大谷石の採掘が本格的になりました。ツルハシで岩盤^{かんぱん}を掘り込み、石として利用できるサイズに切り取りました。この手掘りの時代、切り出された石は、人が背負って地上まで運び上げました。また、石を掘った時に出る大量の石くず（コッパ）も人の力で運びました。

◀ツルハシの柄：一本の大谷石を切り出すために、4000回もふるったと言います。握りしめた手の指のあとが見られます。

（個人蔵）

▶（左）カンテラ：採掘場の照明器具です。（上）スミツボ：石に線を引くための道具です。（下）フィゴ：採掘場で鉄の道具の修理をする時に、火床^{ひどこ}に風を送る道具です。

（いずれも当館蔵）

▶（左）ヤ（右）ヤジメ：ヤは、岩盤から石をはがす時に打ち込んだくさびで、それを打ち込む道具がヤジメです。

（いずれも当館蔵）

▲（上）マサギリ・（下）リョウバ：加工の仕上げに利用しました。
（いずれも当館蔵）



掘って、掘って



運んで、運ぶ、人の力で



（いずれも写真提供：大谷石材協同組合）

大正時代、ウインチの利用が進み、人の力で石を運ばなくてすむようになりました。また、昭和時代も高度経済成長の時期をむかえると、裁断機が発明されました。石を機械で掘ることができるようになり、手掘りの時代が終わりました。同時に、大谷石の輸送の主役は、鉄道からトラックに変わりました。



▲ウインチ
（参考：大谷資料館蔵）



▲チェンソー式裁断機
（参考：大谷資料館蔵）



▲鉄道輸送からトラック輸送へ
（写真提供：個人）



▼（右上）初期の裁断機利用の様子
（写真提供：大谷石材協同組合）
▼（左）裁断機導入時の説明会の様子
（写真提供：大谷石材協同組合）
▲（右）現在の裁断機利用の様子
（写真提供：北戸室石下石材店）
▼（左）現在稼働中の地下採掘場
〔池田緑商店〕



第3章「石のまち」大谷の鉄道

明治時代の終わりごろから、大谷石の運搬の仕事を担当したのは、鉄道です。石をまとめて大量に運ぶことができるようになりました。最初は、人が貨車（客車）を押して運ぶタイプ、人車軌道でした。やがて、蒸気機関車を利用した軽便鉄道に変わりました。昭和6（1931）年、従来の鉄道を東武鉄道が買収しました。



▲「東武鉄道大谷線」で利用された蒸気機関車（おもちゃのまち駅東口）



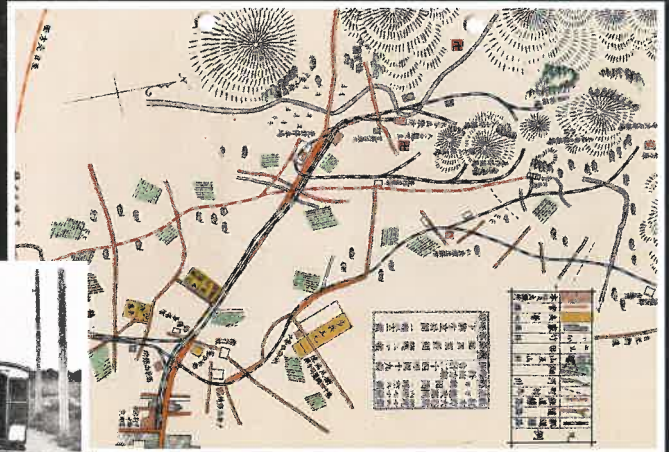
▲（上）軽便鉄道：蒸気機関車を利用して運びます。（大谷荒針駅）
（写真提供：大谷石材協同組合）



▲（上）人車軌道：上は客車、下は貨車をおすタイプです。
（写真提供：大谷石材協同組合）

大谷周辺の人車軌道と軽便鉄道

人車軌道（軌道の幅：610mm）	年	会社名	軽便鉄道（軌道の幅：1067mm）
（宇都宮軌道運輸設立）	明治 29（1896）	宇都宮軌道運輸	
西原～荒針	明治 30（1897）	宇都宮軌道運輸	
荒針～瓦作 荒針～大谷～立岩	明治 30（1897）	宇都宮軌道運輸	
西原～材木町	明治 33（1900）	宇都宮軌道運輸	
西原～鶴田	明治 36（1903）	宇都宮軌道運輸	
（野州人車鉄道を買収）	明治 39（1906）	宇都宮石材軌道	
	大正 4（1915）	宇都宮石材軌道	荒針～鶴田（蒸気機関車による輸送の始まり）
材木町～鶴田（客車廃止）	大正 13（1924）	宇都宮石材軌道	
材木町～大谷（客車ガソリンカー）	昭和 3（1928）	宇都宮石材軌道	
	昭和 4（1929）	宇都宮石材軌道	荒針～立岩
	昭和 6（1931）	東武鉄道	（宇都宮石材軌道を買収）
	昭和 6（1931）	東武鉄道	新鶴田～東武西川田
西原～鶴田（廃止）	昭和 7（1932）	東武鉄道	
材木町～西原（廃止）	昭和 8（1933）	東武鉄道	
西原～荒針（廃止）	昭和 15（1940）	東武鉄道	
	昭和 27（1952）	東武鉄道	新鶴田～鶴田（廃止）
	昭和 37（1962）	東武鉄道	荒針～立岩（廃止）
	昭和 39（1964）	東武鉄道	荒針～東武西川田（廃止）



▲「大谷石材輸送機関線路一覧表」
『大谷石カタログ』（個人蔵）から



第4章「石のまち」大谷の人々

「石のまち」大谷には、人々の生活を象徴する「うた」があります。それぞれの「うた」は、人々の「願い」や「夢」にあふれ、特に家族への深い思いやりの気持ちが人々の心をゆさぶります。

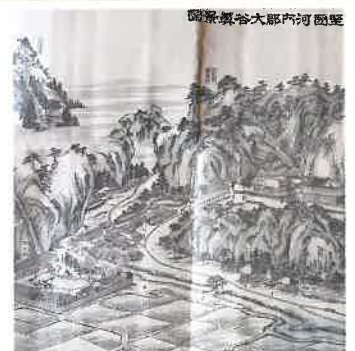
▲（上）立岩街道に立ち並ぶ長屋の風景：街道前方が大谷観音方面（写真提供：個人）

▶（右）映画「石山の歌」の主題歌としてつくられた「石山の歌」。舞台となった宇都宮市立城山中央小学校の第3校歌として現在でも歌い継がれています。家族のために石山で働く父・母・兄と、その姿を感謝の気持ちいっぱいで見守る「おれ」の気持ちが、家族の温かいきずなを感じさせる歌です。

▶（右）『大谷真景図』（部分）（藤田好三氏蔵）：大谷の岩山の景観（姿川後方）を西側から描いた絵図で、下野新聞社の前身、旭香社が作成した記事の一部です。川に沿って人車軌道が描かれ、左側には大谷寺や盤水館が見えます。

石山の歌（一部）

- 1 チャッキンコーン チャッキンコーン 父ちゃん 石おこし
石かたかんべな 腰が痛かんべな 腰もんでやっかんね
- 2 チャッキンコーン チャッキンコーン 母ちゃん こっぱはき
しゅいこ 重かんべな 肩がはったべな 肩もんでやっかんね





▲『大谷早春』(個人蔵)は、昭和を代表する栃木の歌人、影山銀四郎の作品集です。栃木県芸術祭を創設した人物で、晩年、大谷を訪れた際、石山を中心にして営まれている生活、またその人々の姿に感銘を受けて、この歌集をのこしました。

いし山のいしくのいへにひのどもり
ひとのたつきのひそひそと見ゆ



▲大谷の生活にかかせないもの

(左)トックリ:仕事後の楽しみは酒。大谷には酒屋がとて多く、こうした通い徳利が石屋(石工)と酒屋を行ったり来たりしました。

(上)ハンテン(中央)ヤカン(右)ユノミ

(いずれも大谷資料館蔵)



▲大谷石を活用した作品
(大谷石産業株式会社蔵)



▲大谷石を利用したレリーフ
(渡邊哲夫氏作)

いし山のいしくのいへにひのどもり

ひとのたつきのひそひそと見ゆ

第5章「大谷石文化」未来へ

①大谷に集まる芸術家たち

未来をみすえて、様々な芸術家たちが大谷に集まりました。歌人のほかに、画家・陶芸家・彫刻家なども大谷の景観に魅せられ、大谷で活動しました。

②大谷石文化はSDGs(エスディージーズ)だ

大谷では、捨てられたコップの利用、石山の廃坑、石山から出る地下水の利用など、使われなくなったものの再利用が効果的に進められています。地球を守る持続的な取り組みの先進地域です。



▶(上) 大谷石の削りかすと蛍光灯のガラスくずを利用した作品です。(藤原郁三氏作)

▶(右上) 採掘場跡を、生ハム・ワイン熟成、イチゴ栽培に利用している「株式会社屏風岩」の石山入口です。

③大谷石文化の継承を目指して

地元の文化を後世にのこしていくために、若い世代に文化を伝える取り組み、また若い世代が中心となって文化を広める活動も行われています。



◀(左) 運動会の中で、大谷の伝統的な御当地ソング「大谷小唄」が演じられています。

(写真提供:宇都宮市立城山東小学校)

◀(右) 宇都宮市の中学校の授業で利用されている教材:「総合的な学習の時間」の授業で20ページにわたって大谷のことを学習しています。

謝辞: 本展示の開催ならびに本リーフレットの作成にあたり、次の方々、および各機関より御出品・御協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。(五十音順、敬称略) アトリエ森野・池田緑商店・井上俊邦・丑久保久子・宇都宮市・宇都宮市視聴覚ライブラリー・宇都宮市立城山中学校・宇都宮市立城山東小学校・宇都宮大学・NPO 法人大谷石研究会・大川悦男・大塚雅之・大谷石産業株式会社・大谷いちご倶楽部・大谷資料館・大谷寺・大谷石材協同組合・小野口恭子・小山工業高等専門学校・柏村祐司・加藤敏郎・株式会社井上総合印刷・株式会社屏風岩・北戸室石下石材店・クロサキ工芸・越路さいかち庵・高橋佑知商店・多気山持宝院・田中洋一・陶遊舎・栃木県立図書館・栃木県立美術館・栃木県立文書館・能満寺・ピースうつのみや・藤田好三・藤原郁三・渡邊哲夫・和灯屋

背景写真提供: 大谷資料館 特にこどわりのない写真は当館撮影

展示期間: 令和8(2026)年7月18日(土)~9月23日(水) 執筆・デザイン・編集: 佐藤光弘(当館学芸企画推進員)

発行: 栃木県立博物館(宇都宮市睦町2-2) 発行日: 令和8(2026)年7月18日

印刷: (株)松井ビ・テ・オ・印刷



栃木県立博物館